

人生  
つれづれノンフィクション作家 <sup>おき ふじ</sup> 沖藤 典子

## ネパールの山村におなご先生を

昨年10月、ネパールを訪れ、第2の都市ポカラのホテルで行われた「さくら寮」の10周年記念式典に参列しました。さくら

寮は、ポカラ女子大学の初等教育教員養成課程で学ぶ学生のために、食事や生活支援を行う学生寮です。1学年につき10人が2年間、この寮から大学に通い、卒業後は故郷の村の小学校に赴任するのです。

「おなご先生」たち、70人ほどの姿でした。山道を3日間かけて歩いてきた人もいたそうです。さくら寮はNPO法人・日本ネパール女性教育協会が設立、運営し、理事長は文京学院大学(東京)の名誉教授、山下泰子さんが務めます。卒業後も3年間給料を保障し、NPO法人の責任者たちが赴任校への訪問も行います。峻険な山道を、何日も歩いて。その時は彼女たちの喜ぶ顔を見て皆が感激するそうです。

大石先生、あの「おなご先生」と呼ばれた理想の教師の姿がありました。ネパール大使からの「日本の明治期の教育改革を学びたい」という言葉も刺激になりました。

「おなご先生」たち、70人ほどの姿でした。山道を3日間かけて歩いてきた人もいたそうです。さくら寮はNPO法人・日本ネパール女性教育協会が設立、運営し、理事長は文京学院大学(東京)の名誉教授、山下泰子さんが務めます。卒業後も3年間給料を保障し、NPO法人の責任者たちが赴任校への訪問も行います。峻険な山道を、何日も歩いて。その時は彼女たちの喜ぶ顔を見て皆が感激するそうです。

さくら寮はNPO法人・日本ネパール女性教育協会が設立、運営し、理事長は文京学院大学(東京)の名誉教授、山下泰子さんが務めます。卒業後も3年間給料を保障し、NPO法人の責任者たちが赴任校への訪問も行います。峻険な山道を、何日も歩いて。その時は彼女たちの喜ぶ顔を見て皆が感激するそうです。

ネパールの一部の山村には、今でもカーブスト制や、生理中の女性を忌み嫌み隔離してしまう「生理小屋」が残っています。極寒の地では女性が凍死したり、獣に襲われたりと悲惨。政府は生理小屋の禁止令を出していますが、逆に増えている地域もあるとか。学校に行きたいと希望する女の子が、貧困のために父親から殴る蹴るの暴行を受けることもあります。

コンクリート造り3階建てのさくら寮が完成して、第1期生として10人が入寮したのは2006年のことでした。その後、毎年約1千万円の運営費用がかかりましたが、すべて日本人の寄付で賄ってきました。



式典には2000人を超える人々が集まりました。ネパールと日本の政府関係者、一般市民、そして私たちチャリティー・ツアーズの一行も。目を引くのは、さくら寮から巣立ち、今はネパール山村各地で活躍している

ネパールには約60もの部族がいて、細かく分けるとそれに匹敵する言語の数があるとか。しかし、政府が派遣する先生の言葉は、公用語のネパール語だけ。生徒は理解しないし、先生もや

山下さんはさくら寮によって、貧困地域出身の娘に現地語で教育できる女教師育成のための衣食住を提供したのです。その時の山下さんの頭には、壺井栄の「二十四の瞳」に登場する

当初目標だった100人の学生が今年5月に寮を巣立ち、閉寮となります。しかし、その後3年間は国際協力機構(JICA)の草の根技術協力事業として、「女性教師養成制度の構築をめざすプロジェクト」が新たに始まります。

記念式典の前夜、私たちはさくら寮を訪問しました。各地から駆けつけた大勢のおなご先生が、「さくら、さくら、弥生の空は…」と日本語の大合唱で迎えてくれました。その力強く元気な歌声には、「人生の扉をここで開いた」という喜びが込められているように思えました。



撮影 中川 明紀

記念式典の前夜、私たちはさくら寮を訪問しました。各地から駆けつけた大勢のおなご先生が、「さくら、さくら、弥生の空は…」と日本語の大合唱で迎えてくれました。その力強く元気な歌声には、「人生の扉をここで開いた」という喜びが込められているように思えました。